

倉橋の歴史（近世編）

※倉橋町史（平成13年刊行）参考

<目次>

1	江戸時代の支配体制
2	島内の社会構成
3	造船業の展開
4	暮らしと自然環境
5	幕末の倉橋島

1 江戸時代の支配体制

(1) 地方（じかた）支配

- ・兵農分離の結果武士は城下町に居住し、村は百姓身分の人々で構成されることになった。
- ・広島藩の地方支配機構は、郡奉行－群廻り－代官－大庄屋－庄屋
- ・村では「庄屋」が村政を統括し、年貢や諸負担の徴収、藩からの伝達、戸口調査、作況報告、祭礼などあらゆる業務があった。「組頭」は、庄屋を補佐する役目であり、「長百姓（おさびやくしょう）」は、村民の代表で一般村民の身元保証や財政運用のチェックをした。

(2) 倉橋島の庄屋

- ・江戸時代初期から享保時代までは、戦国時代の領主「多賀谷氏」の名や、「瀬越」「藤屋」「浜田屋」などが掲げられ在任期間が明確ではない。
- ・享保以後は、松原「藤屋」「千崎屋」、小林「備前屋」「材木屋」、石原「瀬越屋」などが交代で勤めた。
- ・本浦の者が庄屋を勤めるのが一般的であったが、鹿老渡と海越からも庄屋が出たこともあった。

(3) 庄屋と組頭以外の役目

- ・倉橋島では、庄屋・組頭のほか、さらに役目があった。
- ・筆取（ふでとり） 庄屋のもとで事務を担当
- ・小走（こばしり）・状持（じょうもち） 触書など書類を村内各集落に伝達
- ・肝煎（きもいり） 各集落の取り締まり
- ・蔵番（くらばん） 年貢の一時保管
- ・山守（やまもり） 御建山や御留山の管理

2 島内の社会構成

(1) 人口増加と耕地の拡大

- ・元禄16(1703)年2,936人から文久3(1863)には10,499人に達した。
- ・広島藩全体では、正徳5(1715)年,55万4千人から、文政8(1825)年72万6千人となり、明治15(1882)年にほぼ100万人になった。
- ・藩全体の人口増加は、陸地部では微増であったが、島嶼部は特に安芸郡(江田島,倉橋)は2倍以上の増加であった。
- ・耕地は江戸時代初期には100町程度であったが、江戸末期には実際750町まで拡大した。(藩は110町程度しか把握していなかった)

(2) 家人牛馬改帳(いえひとぎゅうばあらためちょう)

- ・各家別に持ち高,本家,部屋,牛屋などの建物数,家の構成員(名前・性別・続柄・年齢)を記載する。
- ・「本家」は亭主家族,「部屋」は亭主の弟など傍系家族,「藁家(わらや)」や「長屋」は下人が住んでいた。
- ・各浦では女性より男性の方が多いのが一般的であった。それは職業(造船や農業など)に起因している。また,女性が少ないのは,他村へ奉公に出かけた可能性もある。
- ・10歳未満の男女が極端に少ないのは,乳幼児の死亡率が高かったため,ある程度の年齢に達するまで公に届けなかったためらしい。

3 造船業の展開

(1) 江戸時代までの倉橋の造船

- ・弥生時代から鎌倉時代まで瀬戸内海を航行していた船は「準構造船」船の形も細長く,どこの浜でも建造できたので,倉橋島でも各浦で建造が行われた。
- ・室町時代になり,「遣明船」に代表されるように「大板構造」となり,最初の和船となった。南北朝時代以降,倉橋島は,水軍多賀谷氏が領有しており,多くの船が必要とされ,建造されたと考えられる。

(2) 江戸初期から元禄時代までの変遷

- ・豊臣秀吉の時代から江戸時代初期,造船業が産業として成立していた。特に,本浦の地詰帳から,住民が農業以外の収入がなければ生活できないことが明白であり,造船に関わる賃仕事を行っていたと考えられる。
- ・元禄の時代には,大工38人,鍛冶11人,大鋸4人という記録があり,本浦の浜全体で造船が行われていた様子が分かる。

(3) 大名の船と倉橋島

- ・幕府は、大名が500石積み以上の大船を建造することを禁止したが、多くの西国大名が参勤交代で大坂まで海路を取るため、専用の御座船を常備していた。
- ・大名によっては、藩内に船匠を抱えるほか、藩外の棟梁に造船を依頼することがあった。
- ・主な棟梁と藩は
 - 田中屋（オノ木）→豊後森藩，日出藩，広島藩
 - 津和野屋（松原）→津和野藩
 - 浜田屋（上河内）→浜田藩，臼杵藩
 - 怒和屋（オノ木）→広島藩，萩藩，日向飫肥藩
 - 平戸屋（松原）→対馬藩
 - 備前屋（小林）→唐津藩

(4) 造船業に関わった人たち

- ・安永9（1781）年の文書によると、棟梁36人，大工287人，木挽49人。大鋸14人，鍛冶35人，計421人が直接造船に関わっている。（諸職人書出帳）
- ・上記の人数は、江戸時代を通して、また明治前半まあまり変化はない。
- ・大工は島内だけでなく、島外へ出稼ぎという形でその存在を示した。特に、豊後，日向など九州東部が多かった。倉橋で、造船技術を習得した大工は、どこへ行っても通用する技術者であった。

4 暮らしと自然環境

(1) 林野の利用

- ・江戸時代広島藩の林野は、「御建山（おたてやま）」藩の管理下の山，「御留山（おとめやま）」元は村の山であったが立木育成や山論が起こって凍結するため藩の管理にした山，「野山（のやま）」村の入会山，「腰林（こしばやし）」村民個別に所持する山，の4つに分類された。
- ・享保11（1727）年の倉橋島は，御建山2.7%，御留山0.2%，野山20.8%，腰林76.3%と腰林の面積が大きい。これは島嶼部の特色である。
- ・野山（入会山）は，倉橋島の場合集落を利用の基礎単位とした。海越や尾立のように一つの集落で山を持つ場合と，いくつもの集落が一つの山を入会で利用する場合があった。（六郷，九郷山）

(2) 自然とのたたかい

- ・日照り 江戸時代後半は、主なもので3回ほど被害があったとの記録がある。少しの日照りでも陸地に比べ島嶼部の被害は大きかった。
- ・ウンカ 享保17(1733)年から翌年にかけて、蝗(いなご)による大飢饉があったが日常的に警戒されたのはウンカであった。
- ・地震や台風 幕末の記録しか残ってないが、地震は嘉永3(1850)年、安政元(1854)年の2度、台風に関してはしばしば襲来した。
- ・猪と鹿 明和3(1766)年には、安芸郡に鉄砲打ちが48人いたが、最も多いには倉橋島で8名いた。古い例では、延享元(1744)年、釣士田から先奥まで3村が協力して、大規模な猪狩りを実施した。

5 幕末の倉橋島

(1) 幕末の広島藩の海上政策

- ・外国船の接近により、安政2(1855)年、異国船防禦のため、5名を海防掛専務に命じた。
- ・文久3(1863)年横浜でイギリス船1隻購入。
- ・外国船購入とともに西洋型船舶の建造を模索、造船技術者の有無の調査を行った。

(2) 幕末を迎える倉橋島

- ・倉橋島の大工が長崎で公儀御船(コットル船)が建造される時に加わっていた。藩の調査に対して、その大工のことで、コットル船の絵図面を報告、これを検討した藩は、怒和屋に対してコットル船の軍艦3隻を発注した。
- ・長州藩の依頼で、丈夫な船の建造の相談を受けた怒和屋は、船大工らと工夫を凝らし、人力で轆轤を回し、船外の推進用の車を回転させる船を考案し、模型を作成したが、実際の船で試したところ、少し無理があり、実用化しなかった。(利涉船倉橋丸)
- ・全国的な不景気で、海運・造船業も同様であった。最盛期には600人以上いた造船関係者も半減し、出稼ぎに出る状況であった。このままでは倉橋の造船技術が他国に流れ、衰退していくことに危機感を持ち、立て直しなどを藩に支援を要請した。これにより、藩からの貸し付けを受けることにより、設立されたのが「船座御場所」である。しかし、全国的な不況のなかで造船の注文が前提であるため、運営は危ういものがあった。